

明星抄

紅葉賀

花宴

葵五





紅葉賀



卷名 けききりし紅葉賀とけききりし新御
 年一花宴なる新葉の二巻よけ時のしりしと
 葉此賀とそりしりし付るる名なりしりし
 人のゆきとそりしりしりしりしりしりしりし
 乃満るるを賀して行末の寶を并りしりしりし
 天皇のゆきとそりしりしりしりしりしりし
 寺大法師等為奉賀天皇寶筭満于四十又
 十月癸卯嵯峨太皇太后遣使奉賀天皇四十寶
 筭也凡厥山海珍味數百棒既而天皇御紫宸殿
 音樂遙奏歡樂終日云是初也太上天皇之御賀ハ

目 上 葉 賀 二

淳和天皇天長二年十月丙申奉賀太上天皇五
八之御齡ヨシヒラ是始也源氏十七歳ノ十月より十
八歳ノ七月迄此事也河内カハチ十月迄と云ふ事
花鳥ハナトリ十月と云ふ事也いふ

花ハナ朱シユ雀シヤク院ヰンのノ切キレ事コトはハ多タ門カド清スミ賀ガ小コ准ジユ也也其
故コトハハ延ノビ喜キ十トウ月ゲツ七ニチ日ニチ行ユク幸キヨウ朱シユ雀シヤク院ヰン有アル法ホウ皇ワウ
五イハ十トウ賀ガ喜キ三サン月ゲツとト十トウ月ゲツニニ書カキるル事コト也也又マタ醍タリ醐コ門カド
水ミヅ代ノ朱シユ雀シヤク院ヰンとト小コ寛カン平ヘイ法ホウ皇ワウ此コノ法ホウ事コト也也其
小コ一イチ院ヰン事コト事コトありリ是コト別ワケ寛カン平ヘイ法ホウ皇ワウにニ准ジユすル也也
一イチ院ヰン崩ホウ御ギ事コト相キリ臺ツボ帝ノ在サイ位ノ中ノ也也是コト法ホウ皇ワウ
寛カン平ヘイ法ホウ皇ワウ迄マデ法ホウ皇ワウ崩ホウ御ギ事コト後ノ也也是コト法ホウ皇ワウ

朱雀院の行幸

花鳥ハナトリ行ユク事コトはハ多タ門カド清スミ賀ガ小コ准ジユ也也

御門ミカド也也賀ガ喜キ三サン月ゲツ後ノ也也朱シユ雀シヤク院ヰン事コトありリ也也
古コ今イマニニ朱シユ雀シヤク院ヰンのノ女メ即ソレ花ハナ合カヒとトありリ也也
也也其コノ事コトはハ河カハチ内ノ康カウ保ホウ二ニ月ゲツをシ行ユク事コト也也
是コトもモ法ホウ皇ワウ朱シユ雀シヤク院ヰンニニ系ケイ也也朱シユ雀シヤク院ヰン行ユク事コト也也
乞イ後ノチ院ヰン也也脱ダツ履リのノ後ノチ院ヰンのノ内ノ也也

行幸

蔡邕サイヒ云ク天子テンシ車クルマ駕カ所ノ至ニ見ミ令シ長チヤウ三サン老ラウ官カン

属レ親シ臨シ軒ケン作ス樂ガク賜タマフ以テ食シヨク帛ハク民ミン爵シヤク有リ級キヤウ或ハ賜タマフ田テン租ソウ
故コト謂イフ之ノ幸キヨウ 晋シン灼シヤク曰ク民ミン臣チン被カケ其コノ德トク以テ為ス微ケウ倅サウ也也
又マタ顔ゲン師シ古コ曰ク幸キヨウ者ハ可ク慶ケイ幸キヨウ也也故コト福フク喜キ之ノ事コト皆ミナ
称シヨウ為ス幸キヨウ

ゆゑに物んぬるや

蘇東坡の外なるもの

蘇東坡の伝説の足跡なり也

試系 此の美しき試樂調氣をよみて蘇東坡なり

こととあり

るそは 舞のあひて也花をのりやせり

けり年ぬもよりさよふのぬれとも深き事なり

つそは也深き事なり

花ののりたるも ことのあつとらん

あつと事盤まもらん

朱花云 ちののりぬれたるの事盤まのやにや

ぬるに竹息たれを記しに

弾心とらんまに

あつと事盤まの海也河海まみなり

朱花云 青海波ハ義和御時大納言良岑安世作奉勅

命作此舞時依勅改盤涉調詠ハ小野篁朝臣

作之五言四句也

迦陵頻

翻譯此云妙聲鳥大論在殼中未出

發音微妙勝於餘鳥正法念經出妙音

音若天若人緊那羅等無能及者唯除如來音

唐云教鳥此鳥鳴時音中轉苦空無我常

樂我淨土也

表文女作

弘徽殿女御也

神ありそそへ

河海大鏡と云り

朱三ノキトミラ 迎奉 富小 階 沛 是 前 の 沛 版 惟 明 親 王 七 名

ありて舞よ其歌有也の神めぐるを云れ

うそゆい

弘徽後の女神の由云は

今源といふもの神なるも死なざるをあれ

りの云也

有量いありあお

はらげぬありなり

まーらとと也

文いやと

文いあらつり也

きののさうい

物言也

あいなうい

有量の云これなり

いんあうい

こくにけり

対なり也

くそと

物完也

家のい

堂上の人也

あーう

巨々の字也

つとめ

豊白よ徳より有量一の清也

物あり

海の音身のいん物也

他はもありを共たありををせぬ

まゐりわりいりいり 誰か舞のいなり

くそと

まゐりあり也

かしこしきまのー わまり此面さ故にうりて

奥もこむひの汁也ケツ世依ゾクるまかぬー

正下のうい 叙正四位下也ジユスニシタ 延喜御紀云貞觀チニ

以来奉賀時イライ有叙位例也ルキ

これ為よ 源氏ゲンシ免りひうゆきそ各昇進タクシヨツジシ

一筋と也

ひーの世 源北ゲンキお世ゼの叙位ユカと也

まの共比 有垂ユシのま也マますうでいまうんでこ

ふしと

大オホ後コトうりは 夢ユメと此コノ由ユ也

二条院ニジョウイン中人チュウジンひるおる 此コノのノうウか

かこありそりんか夢とごごの知とぼりあり

かうくくく 夢ユメと此コノ性セイとそ也ヤちとく地チとの

ざらやうに平生ヘイセイのありと海ウミのれ也ヤちうにま

なくの地タニ人ヒトよわく心ココロをのたまりま物モノを也

匿カクメ悪アクな共トモ人ヒトなり也ヤらうくあま海ウミ北キタあり

人のありはまの 夢ユメとのひだくもさうひ

キキらラのノのノ也

人ヒトうりまはよ うのおうありの時トキうりみう

めメうりウリ柳ヤナギももも備イてテは物モノと也

をヲもモ急イ死シりぬ とトあアえエあアはハつツみミあ

あアあアうりウリ流リウつツとトしシとトうウいイなり

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

惟^{コト}之^ニより^{シテ}あまのい けあまのあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

けいあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

あまのあまのい 是よりあまのい

うりあまの御魂

源也

あやらかし

はるの御也ひの子の遺骸也

朱河云

文武天皇慶雲元

甲辰

十二月此年天下諸國

疫疾百姓多死始作土牛始追大饑

御記云

今年愁嘆此依不饑疫鬼云宜御所司

もくしとあま

源の御也

くまのしとて

四月一日なれ也

しとて

あゆまう御也

くまのしとてなれとて

はるの御也

くまのしとてなれとて

くまのしとてなれとて

くまのしとてなれとて

はるの御也

夢この御也二重院也

くまのしとてなれとて

くまのしとて

源の御也

わさく人すて

二重院よ人も給きこしあ

くまのしとてなれとて

くまのしとて

源の御也

くまのしとて

何の御也

あまの御也

あまの御也

あまの御也

あまの御也

あまの御也

あまの御也

あまの御也

あつたの給ふ

教有如何との事なりある

かゝも申したののけり

葵と又申す也

見たり給時

おむくひての帳をよき給也

みづらに帯

玉花也 朱花云 名花なるは元

より花飛雪通天を此類也

乞酒之人を

浮世類也今日の事あり

分ありとそ軒破し給也

そと海されあ

花の類也

玉さうそ

海をうりその事ありと

ひこあつたのそりてとやとてと也

一院 花名あり

朱花云 け一院の宣平は宣平に准

むく一或又陽成院ともいふ事あり

文の几帳

なつり也

これ由事の

花垂の懐雅の事也

源家海に四月に山門の事なれ三月より

さうしん也正月よりと也

中おの意い

海也け時の記ども花色

の事いみじ

世代中の由あるま

花垂の由をす

二月の十日の事

一月越り也

今なり

花垂の由也けつあり

つゆのあつたの事なれと花散るの由也

又なほいふるもさし あひなきうらみ

くのあまのこころいりおほくもいかにあはれ

海舟のききよ 海を東交よきおのこころ

は情くあがりそよ

まよふるもいふい 長交よしあはれ

みこころあまのこ 物定也

そよのこころなし そよの海舟のこころ

いかにあはれあはれ 海あはれいかにあはれ

まらこころおのこころあはれいかにあはれ

まらこころあはれいかにあはれ

あそりうらみあはれいかにあはれ け緒のこころ

奇妙也如切如磬如珠如磨瑟兮 偈号赫

号喧号あはれの文勢あり

あそりあはれいかにあはれ ありあはれいかにあはれ

あそりあはれいかにあはれ

うらみあはれいかにあはれ 弟也

あそりあはれいかにあはれ

あそりあはれいかにあはれ 弟也

あそりあはれいかにあはれ

あそりあはれいかにあはれ 弟也

あそりあはれいかにあはれ 弟也

あそりあはれいかにあはれ

袖あわく 物ぶのへひとち成也

ふりこひあつら 命換のうましくとて

まじのひをなれい せいのひ後へも入らず

まじとせ後てまます也

女意あつら けいふ也あつら所の花と接子

なりの面白ふ書換也

まのなつら 漆のうへくと結結をうみ

うがあつら也

こらやと ころんと也 朱ていよと切えがり

あづととも海り玉りぬとらへはぐく也漆此

ふり結ひてのけあとのうへへ結てても海り結らぬ也

うしみね結也

りつめり漆の 朱 漆をえん入あつら結れまなれ也

こらめくすくあつらくのありき

こらめにあつら 朱 伊勢の海へ此朝を夕まにうくこ

こらめいんやあつらりるな

さうれとら 筆北十三結のうち中^トの巾^キけ

三北結りてさ也 其りえと此中の巾一のなれ

とつあ也 兄中をも中^トのとりとち

結てけ物結よあつら中の結れせりうくこを

さくくさすをなるへ

あつら たる也

ありていらいく

ありていらいく

しとやう也

かそりくせり

長條糸の破也

いそびく

源内糸の破也

まじく

きは絲糸也

紫糸の破也

くそく

くゆを足控え

源の破なり

朱ッチワタ内海りみどり

くまひよんあそ

くまひよんあそ

くまひよんあそ

あひくもかく

うらあそく

禁中糸の破なり

あひのさひ

あひのさひ

あひのさひ

あひのさひ

あひのさひ

あひのさひ

あひのさひ

源内の破也

あひのさひ

典侍

あひのさひ

源内の破なり

あひのさひ

あひのさひ

あひのさひ

ういすうちまのん はきまめくしては

いんいんようちま を着するとも

ぐいすいすい 央也あつむも

まうは この字法

けそ おれ目の皮の白粉

也 倍す

い 扇

いん 也

木たう いりれ

てめう くす

いんいんいんいんいんいん いん

めう いんいんいんいんいん

毒 下

子 不愛也

毒 いん

おれ 毒

女 いん

あ いん

秀 いん

い いん

いん いん

あなまろり

海の初也

くものちるまふい

けんのまろり

まろりい油とら也

あまろり

あまろり

まろりとまろり

中千七八の

音は續也

二平のまろり

中くまろり

海の初也中ねとまろり也

つむじも

中ねの音也海のはたのひ事也

あまろり

あまろり

剣のこまめれ夜はひん

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

あまろりい油とら也

海へ行くや世中

引舟未勤唯世ならむ

親でござる也

ともしすれん け事をこころに志す也

中ねいりうとれ 夢よ也

せんいりあつて 是より心下うけさうてあん

と云ますて系地也

この中ねいりうとれ 非もへ係りてはよ一に

ぬんといけ中ねいりうとれ也

七月五日 有垂の女侍中文字よき所なり

也は内中十月と云て七月うけおれせうなる也

宿文友渥子昭宣云の由じもあ也宣平の由

七月中宮より立給ふ昌泰二より七月末迄

よりけあに換して書付あなりへ一絶も七

月むす地也

源氏の意宰相よりなり給ぬ 是より源氏

宰相中ねいり

みとかりぬえせ給らん 天文八五女九於禁

中一籍さのけぬる籍也

このより文字よ 有垂は殿のあ文冷泉院也

源氏の 物政の外部代よりを解なり

舟文よとふ 有垂中文字よき所也

いりてせん 弘徽殿よりと云てなりとみまの意

されと春文の所せちうありぬれううひあき
位ありとあめめはとめよとそ実をさるけ
け所も禁裏よりと海人く時累

大徳也 大餘年と音よよし也

まのりくまの取の 中文入内也

備してよりそ死由公あり 源也

そくありき 花立ぶらりと云やうにあり

つぎもとり 花やういふ文也を并りて

よの首盡也

文いしくあーと 源はけ文の如きなり也

月日此ひりの 是の源は如きなりと云

花宴例事

桐壺帝を醍醐に准むゆり

就て彼御宇花宴の事延喜十七

年三月六日常寧殿花宴詩題春夜翫櫻花

延長四二月十七日清凉殿花宴詩題櫻繁春

日斜此例此物語當より各有探韻作文御遊

事此兩度之例よ不ても也 南殿花宴例事

村上康保二三月櫻樹於南殿有花宴詠古

詩誦新歌云此時探韻無之延喜以後の事な

まごごと 准擬の例也

け物語の花宴も宮の法原あり 還沛ありて

終りとして云はる延喜の考定る後の花宴あり

宴席をハ法原殿にて開き也天慶四年三月十五日仁壽殿に宴題花樹暮雲涼
之終も宴ハ法原殿にてありけり物終も南
西橋の後ありて法原殿へゆきけり宴を
行ふとて公の地也

拾遺天徳三年三月内裏より花宴せむ勢行
も侍よ九条右大臣

櫛もこころひささふゆきあぐりかくてゆきせの
まはしうりあ

花宴

源十九歳之春官宰相中將正三位也卷名南殿
櫻之宴事也則花宴也唐玉りの花と云ハ牡丹
日本ハ花と云ハ櫻也櫻宴ハ花宴差別ありけり
類聚國史三十二云弘仁三年二月辛丑幸神泉苑
覽花樹命文人賦詩賜綿有着花宴之節始於
此花宴例諸抄委之侍らげ物終ハ夜是の例也
月令をそりきるとみえり但延長四年の例は初七
きささの日の也 延長四年二月十七日宴け物
終の准擬よおる也けり醍醐内門延長四年の
末也今ハ花宴も相壺内代の末事也二月九日

日と暮の延びしりけり

後集文

真有盡善文の朱雀院也

たふりし

たふりしは後集の東西也

あまのたふりしは後の右西なり

近世の例よりて清涼殿よりゆきせりてと云ふ

なりしときけきつれりちみされりる事いふ

後集の共たよりありけり

二まじりての女也

有盡の立居と云はれしを

ゆき同座と云ふ也されとも今日ハ集り也

日と暮の延びし

時々の常気又其比の文字

の延びしなりてと云ふ也未代雲の神

そみよの他者の筆は粉骨もむらり

そのたけ

文學のむらりなり

先ホ一之儒者奉仰献題次書韻字盛中院置

庭中文墓上近衛次將先探御料韻字二置書

蓋鼻自御前階献之次公卿堪属文者文人等

各進文墓頭探一字見之類官姓名及所探字也

今案探韻各分一字詩也悉韻字替也故懐紙端

作云春日同賦春夜翫櫻花各分一字應制詩探

其如此可書也

うんわん

韻の字と一字所くさり得て待

と他也各分一字たり也花よりん

宰相中ねまじり

約字を採えん

各それより一をP也言姓右何の字と約字を
あの地也と白の花実よ書字よりえぬ
自然の音也とんづつひ音故ちづつひあるを
まじりといふなり

しんふりちる

是とこのをとりぬらる

ふり一也

えのん

係以中ねの事れん

はあーちる

勝一をとりぬらる

やまき事なれと

約の後白首地

と約すまじりなれと可直よ志あつひ

今案あさづら約れふにあらんとも立出た

自如りつ可の進退

ま老ころんせ

物の進ころ特人何とも

ふぬ也何事もの勢たを狭く

くともみら

進長定まの例を用て書物と

みしれもけぬい樂あーこれとみやり

てり也

朱花云

凡花実少

花

むらりて舞樂

み

但天曆三年

陽成也

花実同月

十百仁書教花実各有舞樂即表春

又地下伶人づらりて教この舞いあさ也

の

西宮に文藝をとりてはあつて文人として
階下に建て 篠頭を治也

白土に 毎句秀逸の故也

わうやうの 弟也相繼弟の何れも源

氏の志をえり一語一也

中文は月のさまり 中文の者重

善美の女師 一語のいひはよわくは

あつてはえ給ぞとあり

さうかうとよも 又さうにふあつてはよも

御一書也

あつてはえ ちとあつては 今も

あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは

あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは
あつてはえとよもいそめては風流にふたぢやいそは

あふまふのいふもよみまきねしむいよまふうら
一万才七點ナ然ラ不フ有シ

こまこてんの 相壘のすらうの也

あそこのよきうらう路しむいこのいあふいり

わうあふ廊の中この也

あうあふ世半此あやまらひ ちふんあらうら

ある世あらの人のあやまらひあけあふらうら

いあふいあまふくああゆ けうれ字法て終あり

されど疑の款れ字ふにねむけ相奥あふんくうら

あふあふの ちうふありのもふけざらああら

けあふああそいあふい也 天文八三月のれ

穽うう入月ふふあうら 愚案け勝月秋の也

あふあふあふあふうら 月とあふあふあふ

三月たふれ月いんそくあふあふ也

まういあふいあふあふいあふ 流れ日赫あ

あふあふあふあふあふあふ 計畧よのた也け

人よあふあふあふのいあ也

この意と ちあふあふあふあふあふ也

あふあふあふあふあふあふ ぬれあふ也

あふあふあふあふあふあふ 流の初也

あふあふあふあふあふあふ 向後何とてあふあふあふあふ

うたあふあふ 勝月秋のち也けあふあふ

とらあしなりこはさの原道もあはれいふ事
なるふきのしむふいふはまゝあはれいふ事
てふらふいふはまゝあはれいふ事也

とらあしなりこはさの原道もあはれいふ事 後の御也

是の御なりとらあしと也げふふいふ事也

河海流むすはたさるふいふ事也

いづれと けんの弘徽教方の人といふ事也

がふらと流しといふ事也中ねいふ事なりけ

てふらふいふ事也あはれいふ事也

あはれいふ事也あはれいふ事也

あはれいふ事也あはれいふ事也

他にこの藤元流したるはといふ事也

もたすいふ事也

あはれいふ事也

あはれいふ事也

あはれいふ事也 兼日 弘徽教也

あはれいふ事也

あはれいふ事也

あはれいふ事也

あはれいふ事也 漸次免志也

あはれいふ事也

あはれいふ事也

いかにしつとてはよきとてはよきとて

とありて也

ちよきとてはよきとて

ちよきとてはよきとて 築田のありては

ちよきとてはよきとて 築田のありては

ちよきとてはよきとて 築田のありては

ちよきとてはよきとて 築田のありては

ちよきとてはよきとて 築田のありては

ちよきとてはよきとて 築田のありては

ちよきとてはよきとて 築田のありては

ちよきとてはよきとて 築田のありては

のちよきとてはよきとて 築田のありては

夢上の意下也

その目見換えん 坊部の也也也

花屋と云々目見換えん 坊部の也也也

あつとてはよきとて 築田のありては

ちよきとてはよきとて 築田のありては

あつとてはよきとて 築田のありては

あつとてはよきとて 築田のありては

あつとてはよきとて 築田のありては

あつとてはよきとて 築田のありては

あつとてはよきとて 築田のありては

て推^ユえ^シる^キ居^ル御^也

水の陣^ハ 花^云中^ナ重^エの^ハ水^ハ除^ハの^ハ玄^ガ輝^キ門^ノの方^カ也^ニ

右^キ中^ノ弁^ノ 勝^キ月^ノ夜^ノの^ハ足^ノ也^ニ

り^シあ^シて 中^ノを^リ道^トと^シ定^メ解^ス也^ニ

又^シか^シ 又^レれ^ノの^ハ字^ヲ解^スて^シと^シく^シと^シ也^ニ

し^テい^ハふ^ル也^ニ

ま^シく^シ乃^シも^シ候^ニ 色^シ一^ニ也^ニ

娘^ノ美^シり^シん 安^シの^ハの^ハ也^ニの^ハ相^ノは^シく^シ

あ^シめ^シの^ハあ^シと^シあ^シり^シ娘^ノ美^シれ^シの^ハ也^ニ

一^ニあ^シる^ニ

あ^シの^ハ也^ニ 一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

櫓^ノも^シの^ハ也^ニ 櫓^ノも^シの^ハ也^ニ

他^ノ中^ニも^シの^ハ也^ニ 一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

今^ノ案^ノ櫓^ノの^ハ也^ニ 一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

一^ニは^シる^ニ 一^ニは^シる^ニ

かゝるものなり

源平なり

ゆりしゆらめあり

弘徽殿此わらうあり

ふれりあり

今よち大后の宮より踊る

後室あり也

朱三ノ花云 二葉大后宮より七ゆり越有て共結よ

の宴あり 河云踊る後室より結也延長七年

二月の紀云踏掌而奉仕踊奇後室

花云 後室より天曆三年の飛香舎花宴有與

大や事よ准として於私宮有け事私之宴之

例可考

わりたりなり

西の半とあり

朱 花の宴はさうまるとをいふことと書

るる相也 花の宴はさうまると

有今よ 弘平人の子をいふに花の宴はさうまると

あん後でさうまるといふに花の宴はさうまると

あもさうまるといふに花の宴はさうまると

け結指也 花説

文連の 弘徽殿の正殿の文連也源氏姉妹也

おんせり 源氏也

家室の 今よりいふに我室は花乃

あはさうまるといふに花の宴はさうまると

さうまるといふに花の宴はさうまると

吾室は花をいふに花

換行りをわつりせぬ也

女みこころ 浴衣は身ミの事也ミ衣イは衣イたる

ついにいれどくしきつるつるをぞくしきく

くくあしゆそとに教訓ある也

さうらひのさの せむにみしり

朱河云 唐あやこ 花云 梅のうらみさの面オモテは

唐の綺キは蕙ケイ芳の裏ウラを付り也 湯ユ幸キチは

有アひ事

花云 今案くくのきく地の色シキは何ニも色シキの

の糸イトりハ一色シキして織オリら也唐カラ織オリ物モノ二重

とり地のぞく唐カラ装束ヤウゾクとして著キテは有アひ

建タテ下カサ襲カサう人の袴ハカマは唐カラの袴ハカマと判ル也

ありいりあくひきり 直衣布袴チキフハカマと云出立也

朱花云 西宮云 上ウヘ鵬カサ者直衣下チキカサ着キ下カサ襲カサ随ツ便ニ不ス常ニ更ニ

云云 今案袍カサは下カサ襲カサ重カサめらと云布袴フハカマと云上下

用ル之事也直衣布袴チキフハカマ依ヨ時トキ依ヨ人ヒト事也コト帶オビ丸マル鞞キ

也晴時ハレトキ着キ時トキ繪エ野ノ太刀タチ云云

らみ人のさめ 坊人の袍カサを着也

あされら ちどけあきしり也

衣のいりひも ちどけ

あいのやめらさまに ちどけ解トキ也

さうらひあり ちどけうらくさうらひなりとあ

あつさり 今日らうの結あねの心結あり
百の戸口もま也

何ゆまどふそと也

え志のこめ さてい海のあまを志う結と勝

月取のそそえ志のび結とめ也

あつさり あつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

圓融流集う結の比文に海也結と

引たり此の結あつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

あつさりあつさりあつさりあつさりあつさりあつさり

物書筆ハ辨務の上花宴の巻ハ
正に疑有る也と云々

明 花宴

十五

花鳥云舊説ニ花宴卷とげ卷と此年紀同おと云云

ありふり此相違也仍六ヶ条の疑と奉らる

一疑云二条大臣花宴ハ三月下旬也此卷の法院の内櫻

四月也兩月の方幾の日教多し然も未蓮院受

禪冷泉院立坊源氏任大將法院法字此ト定

等条々事何るにて教りか

二疑云源氏任大將事ハの榮史によ方に一ありて事

相もえちる蓋然きと然も花宴卷ハ十九也也

卷と同時と云ふも也

三疑云花宴卷ハ紫上十二也葵卷同年ありハ新枕の

事不審醫書あり女子十四ありて天啓至れと云り

相 花宴

不_レ敬_ル知_ルくま_ク

世_中ありて

相_キ壘_{ツホ}の帝_{ミカド}位_イをさ_り給_ス也

相_キ壘_{ツホ}の脱_{タシ}履_シ朱_ス萑_サ院_イ代_{カリ}替_{ホホ}右_{ホホ}任_ニ任_ニ改_メを

ま_じる_ハ源_{ゲン}氏_シ夫_ハ討_ツ也

よろ_の地_チく

朱_ス萑_サ院_イの代_ヨ始_{ハジ}を_れハ源_{ゲン}氏_シ又

帝_{ミカド}の代_ヨ代_ヨて_るま_じら_りよろ_づ地_チよ_おも_て

や_うい_ふも_あら_ずと_も也

ゆ_ゑ此_レ源_{ゲン}氏_シと_おも_ふ

源_{ゲン}氏_シよ_あり_給也

顯_{ケン}職_{シヨク}ろ_ろあ_らり_し也_びあ_らり_しも_あら_ず也

け_こ細_コう_りち_わと_まへ_り某_{モト}死_シゆ_ゑ後_{ノチ}二_ニ某_{モト}関_ケ

白_{モロ}竹_{タケ}通_{トウ}兼_{ケン}保_ホ四_シ三_{サン}七_{シチ}任_ニ兼_{ケン}議_ギ同_{ドウ}四_シ月_{ゲツ}言_{コト}意_イた_らぬ

言_{コト}と_う一_{イチ}也

此_レ源_{ゲン}氏_シと_おも_ふ也

此_レも_あら_ず也

此_レも_あら_ず也

と_もあ_らず_のい_ふも_あら_ず也

今_{イマ}も_あら_ず

御_{ミコ}脱_{タシ}履_シあ_らり_し也

こ_のい_ふも_あら_ず也

此_レも_あら_ず也

弘_{コウ}徽_キ院_イ

弘_{コウ}徽_キ院_イ也_也也

小_コ藤_{フジ}壘_{ツホ}と_{一_{イチ}所_{トコロ}に}あ_らす_也

内_{ウチ}の_いふ_もあ_らず_也

朱_ス萑_サ院_イ即_ス位_イの_なり

弘_{コウ}徽_キ院_イ女_メ侍_シを_あら_ず也

こ_のい_ふも_あら_ず

若_ニ壘_{ツホ}の_いふ_もあ_らず

まゝも地

ありありと書いて

相違シヤクマツの事也

今此のありはまゝ也

院中イナウチの事也

よき交ヨキカウを

今此流立坊イマココリウタテボウの事也

源氏ゲンジの事也

今此流立坊イマココリウタテボウの事也

交カウの事也

の事也

はうらふれ

友重トモシゲの事也

やがりの事也

大の事

けしきケシキの事也

おもしろい例オモシロイレイの事也

三平ミナヒラの事也
て大の事也
いし目イシメの事也
仲通ナカトウの事也
えりりエリリの事也
とあり

はるやの事也

物結モノムスの事也

いすも地代の始イスマチノハジメの事也

はむの事

秋好アキヨシの事也

是の事也

お坊オボウの事也

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

わんわんわんわんわん

わんわんわんわんわん

割^{ロイ}止^レよーりーりーり

あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

いよいよいよいよいよいよ

の雅氣也ヤキと云々。妻を爲るに志るや、其の事に
事を加へて書する人、或や其の爲るを
するものあり也。

此を此爲人のせう 邪ヤに其の足事也

つがさうそく 是物の女房ごり也

まのこころにさうらふも、老女の足

物を出るものついで、物なりを今日

こころと見らる

ふまこころ 是もつが世来のものなり也

てをつらりて 花のあそ、宋朝よ有る相如と

いひ、老子の洛中に入、何れ是と云るれば、

額カシよ加へ、その通鑑と云書に見たり、

是思ふよりて、流るる人、是の司馬相公

なり、一司馬温公也、相公の漢の代の人

也、公の字を如の字に、通鑑も

宋朝通鑑なり、一司馬光、開國衛士、以手加

額曰、け司馬の相公也、河大鏡云、一条院、

其の世に、大まそひの、世に、

世界の民百姓、其の世に、

ておぐ、をり、

おれ、皆、

桃園也

朝朝の世、

延喜式云凡天皇即位者定伊勢太神宮之齋
王仍簡内親王未嫁者訖即遣勅使於彼家
示事由神祇祐以上一人率僚下随勅使共向
卜部解除神部以木綿着賢木立殿四面及内外
門今案秋好中官者去年卜定ありて未詔目入
詔乎中の事いまして詔神祇志好ふと延喜
の條にありと是を云也

柳のこけりうに 非りりして對面あり也

河 柳ハ日本紀よ志異本と志改樹とも申り天
香久山の柳より非の好本とい柳の多の日
の化字也詔詔本と書之云々

かゝるにそんくくく 是今對面あり也

とり深のち也

きふの二条院より 深也

こもをれんを 推古天皇十二年甲子正月

戊午朔始用曆

まの女房いそひと 今日ハ深と女車と云

ぬつと也

うねりのうにんぬ 童女のねはくあり

時着を舟由花をい思ふり

河云浮線縵の袴也よりけ袴也の葉也

ありき 西宮云女親と對面のともと總角者著

花

二

汗衫半臂下襲表袴玉帶等又齊宮齊院之
童女總角青麴塵汗枚半臂下襲表袴白柳
帶 今案童女晴時打袴上表袴とさるるうと又
窠窠也世に常より表袴不着る

悉のぬくはれそんとそ けとと深のそと
えりあき 祝言也 河海祝言のつら
それの具是よ海書と用也き 花 うかた髪
うかた髪とてはなつらつらう也き
りいろとそ みるいふとと海をいふ
あきとつらつらうとていふは
きとととて 今日物かん車のまきと也

ひまはれかき 一帯也 河た近き傍ハ一条西洞流
ちとる傍ハ一条大文也 花 けいハハ木と云
ゆ也てなるとそたのる場よあり五月の騎
射の時中かおの着座もろお也 花 衣の衣大
内此時ハ水陣とて一帯と東ととに依て
衣をのし衣の程とまら也
いんえはつらお 海北也 帯也
扇のつらつらつて 花 扇の端をわらわ
はるや 夢ハ夢と云わらわらとよ
めつ此ゆかるとつらつらと今りの夢の使とて
朝つらふふは日車と云ふやういふと也

たのめ内中
う一也 花 花江の ホカ 舟や ホカ 舟の ホカ 舟の
内も ホカ 舟の

夢と ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
八十氏 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
也 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
後 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
夢と ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
い ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
後 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
い ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の

花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の
花 ホカ 舟の ホカ 舟の ホカ 舟の

おのまのつとすむ

河海遊仙窟

窮鬼故調人イキス冬、ユサシニヒスラ

注 人夢魂與鬼通言我心中

正憶ニオモフ此コノ十娘トウナ忽ニ即ニ夢見ニ憎ニ忽ニ此鬼コノキ作ス夢ニ誰ニ我故ニ

罵ノ之ヲ曰ク窮鬼ニ也ナリ韓退カンタ之ノ窮鬼ニハ云フ云フ也ナリ

二条の巻 けふとくまごあらねと人かきそとく懸

すまふらうゆめれと 是夢とのゆめれとろ

うらに根ありそえだざらうゆめれと此君のやめれと

ひひく 宗の字也

くはくくと孫とのこ ぬの乳れ孫也

院ふらも 相帝也

あまをあら 買ふたりのみくろり

のそめいふまそも 人の根むづこあをうら

ゆらあまきこの也越下て権門の方いふ不有乃

まは根あつとぶおざらゆめれと此所を云はれけつと也

くゆはゆめれい 此の字也

わらにまらりゆめれ 此の字なりぬも他ありたり

つらゆめれまど 折也

やめれ人のの 夢との字也

あつとらまも 此れ根也まもまんとそえん

とまそを切てあゆみ

うらとまめゆめれけ 此の字ありゆめれ也

おゆりまられまんとら 此の字ありの字也

願んとしてあつていふ 夢と此懐妊の也

水文をうりそ 源を治る人む也

見此すうー 又の相也夢とのうづのひは

まののこつを 創式レイキのうこつげとくも也

神めうー 山岳の奇け物治中一の言と

ちの只家かうく物と也

山代井のあり くのそはそめさげの候ナキナれが

神のめうくらの井れあ ちいてのまのナキナ勢と也

水のれうら ちの造りぬる人む也

いふうやもあつていふ ちうふらうくも

いふらの神イサガおのひじふおれをたへん也

といていふ事の中あつていふ

神のめうくや 山の井れあつてあつ相いむ

うりけは水かよとていふ伊勢物結ふものも

ととりあつていふいめをえあつていふ

しててもいふ事と也

ちがひ源イをひらちち付らる相也さそ神めう

まのうり回イもよらうと人む也

あつていふ 源れを贈答イの中と也がもそが

山麓考の税山回のをいふをめうくかふとあつて

あつていふ 大瓶のゆあつていふとあつていふ

いふをいふあつていふ夢とのよしくイぬひぬり

とが推登あるべしと也

故又かゝの 阿婆よ大慶の又大居れことん
 みる得也家ももむる統又大居い由是あふの子ま
 の死身と云也まて地平具平親王宇治園白
 尋氣よ出給る弟花物倍才十二は阿り
 寄一いつれい ちのやとさあももあふ也
 ちひよしのいふもちん 多平木の歌とて
 とらあふいのあつひりのあひもらるなるいひの
 一りりてなあ
 まう打まらうと給ふ 安きおのまどらうと給
 何うあうのあふい給ふと也娘まの夢と也

いふよ 幸也 イシヤ いふよ 幸也 幸也 幸也 幸也 幸也

身を捨て かと捨てらるやとく人となり

糸そら物いあなりと也り

うらふあも 河原公方 現人 ウツレモロフ 日本紀

樹花本傳ひらうの言れらうと也のあ思ひあふ

なごうう 若の幸也

礼ひまう世なをくなり 死身い言れと也 ツチ

すしていあなさいとて 海也

あふも物なあり ちひよもあふとあふなり

あふもあふとあふとあふと

あふもあふとあふとあふと

ますし内よ入給ふと花月よ入給ふと花月の
うらたにたまるの司り入給ふと花月

九月神交祭の月也
喜式云ん神王入給
ふ時自九月一日迄廿日

こころのほけしん
おまへ入る海もあまは

襖もささか花鳥よ見たり
花語交信司よ入給

りんとそよみ遊交に
入んとそよみ東河より

襖ありと乞と二衣の襖
とも也他群所の時也

西河よとあふ也

まき海も此
夢と也

まき海も此
夢との西岸の夢也

ちねふゆゆつと
夢との海も物との夢也

あゝもあゝと
あゝの母也

法華經
敏達天皇六年渡本朝羅什三

藏譯又推古天皇御時
聖德太子迎持法華經

等遣渡小野妹子

志ろふゆえ
産婦のいそこ也

くうんこそらうとげふ
夢とのうへおとげ

うらたにたまるの司り
入給ふと花月

泪のこりりこさ海
夢との君れうりて海

氏をおまかり涙を
こらす也

あまのりいさうを
れも也 夢と也

禮記内則篇云國君世子生告于君接以大牢
注云 接讀為捷捷勝也謂食其母使補屈強
氣也又左傳桓公六年傳日九月丁卯子同生以
太子生之禮舉之接以大牢

却こてきん 家にとく男そとて書ふる筆法
ちつりて面白くとき

つらあひとて けいこの字 郭公あ

ふきつひのあぢあぢめーきくめさせつひ
とてつりて

ゆそみとて 邪氣の護摩いふ芥子とあへ
其番は書おのむとて

ゆのすう 髪あふる也 河史記沐字を

ゆのすうと接り

ゆいゆいゆいも 西風おのちらぬ事也

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい 夢とてゆいゆい

入るりてゆいゆいゆい

ゆいゆいゆい 源のゆい也

ゆいゆいゆい 西風おのちらぬ事也

ゆいゆいゆいゆいゆいゆい けいこゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆい

ゆいゆいゆいゆいゆい 今ゆいゆいゆい

夢とてゆいゆいゆい

いづりりきりあき

なるれきりあき

げらるれどきと平愈あき

きあふりり

冷泉流は流似海の流也

きりりりりりりりり

森田(カ)

りりりりりりりりり

夢上(カ)射(カ)あき

りりりりりりりりり

流(カ)りりりりりりり

きりりりりりりりり

きりりりりりりりり

流(カ)りりりりりりり

きりりりりりりりり

流(カ)りり

きりりりりりりりり

夢(カ)りり

例(カ)りりりりりりり

とよ(カ)りりりりり

あきりりりり

夢(カ)りりりりりりり

きりりりりりりりり

きりりりりりりりり

夢(カ)りりりりりりり

きりりりりりりりり

寂(カ)りりりりり

秋(カ)りりりりり

八月(カ)りりりりりりり

陰(カ)りりりりりりりり

きりりりりりりりり

人(カ)りりりりりりり

河(カ)りりりりりりりり

きりりりりりりりり

行(カ)りりりりりりり

きりりりりりりりり

廢(カ)りりりりり

は(カ)りりりりりりり

死(カ)りりりりりりり

あつたてのまゝの 後の裁ひのまゝの

着るべきを服するべき物をもて也

くたりのあつたて 取あつて空より軽服と着る

し服とあつたてはよ別裁しつけ衣の色は為

るべきを云り

あつたてのまゝのあつたて大士 善愛の法界あり

ゆふあつたてと三昧と手付也大士の法也

けりありといふまゝのまゝ也

なつたてのまゝのまゝ 結ひと形人のまゝあり

せんけよ忠のまゝといふまゝ

あつたてのまゝのまゝ 母文也

あつたてのまゝのまゝのまゝ けりあるまゝのまゝ

あつたてのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

今裁と云くまゝと絶をわけてまゝのまゝ

かきりあるまゝのまゝのまゝのまゝ

あつたてのまゝのまゝのまゝのまゝ

あつたてのまゝのまゝのまゝのまゝ

あつたてのまゝのまゝのまゝのまゝ

あつたてのまゝのまゝのまゝのまゝ

あつたてのまゝのまゝのまゝのまゝ

あつたてのまゝのまゝのまゝのまゝ 八月は徳司

よしおしんしんまき申に大内の子司入給し
ふねにまきまき也た坊の司入給しんえ
はまきまきまきありていへるまき也た坊
のしんしんまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

今の時分けありは事
 先らうりもれどもらうりもれども
 今のおるうり
 源のち
 夢よ定業うりもあつめ也
 今新字の辰の物
 ありは極くび様変うりもをまうりすりも
 ありは源のちあり也
 今新字の辰の物
 ありは極くび様変うりもをまうりすりも
 ありは源のちあり也

今新字の辰の物
 ありは極くび様変うりもをまうりすりも
 ありは源のちあり也
 今新字の辰の物
 ありは極くび様変うりもをまうりすりも
 ありは源のちあり也
 今新字の辰の物
 ありは極くび様変うりもをまうりすりも
 ありは源のちあり也
 今新字の辰の物
 ありは極くび様変うりもをまうりすりも
 ありは源のちあり也

・昔はゆかほれ中おのりて也

とらうそくー 人いよほれ中いよてのほ也

きやう一日 五日也四十九日のひりよまじは事い

十九日よりうちにきあがほらうらうー

三夜中お 乃中ぬこはよ成ほりまうえみら

の肉竹のまら 源内竹のまけ也

あらいまきーや 後の物也

をさしあしー うらあしき也

ふらうまひのまらうをらうー ひとあしーとあり

める是らうらうまひに大ゆふのまれ時のほ也ま

摘よあひぬー時のひりぶらうひの月ふら中おの

源氏とんねーうりー孝隆まうとのひ也

秋のひりま 末摘まにほ朝よ中おれ

ぬあひけをうまこらあしー時のひ也まらに

うらうとあてあふー

まららちて 昔はほれまの十日にあてまら

中おのまの色のをけ 中おのまのまれの

つみてに地ををうすくあーほ也

あーうー 鬼くまのの也

はあーうふ 面白いは也

あしあうましーやをうにまら 刈高錫がうら

巫山神女且為行雲暮為行雨朝朝暮暮陽臺

下先宋王^ト神女^{シニ}賦^ヲと^リて^シ禹錫^ウ妻^メと^シ失^ク時^ヲ
の詩^ヲを^シり^テなり^キ相^ア逢^フ相^ア失^フ兩^ハ如^ク夢^ノ為^シ雨^ト為^シ雲^ト
今^ハ不^レ知^ラ

女^メを^シり^テ 中^ノお^のの^こ也

ひも^トを^シり^テ 花^ヲを^シて^シ夜^ノの^ひも^ノ換^ドころ^ニ

悔^テお^のを^シり^テと^リあり^キ也^ナ中^ノお^のの^こを^シり^テ不^レ知^ラ

既^ニあり^キ引^ッつ^テい^ハひ^キも^トを^シり^テ不^レ知^ラ

こ^ノ今^ハす^レも^ト 中^ノお^のの^こを^シり^テ不^レ知^ラ

を^シり^テを^シり^テ着^キし^テ也^ナ志^ノの^ゆを^シり^テ不^レ知^ラ

これ^ヲを^シり^テわ^ケら^レる^ル 中^ノお^のの^こを^シり^テ不^レ知^ラ

中^ノお^のの^こを^シり^テ不^レ知^ラ 昔^ノ妹^ノの^いま^ニあ^リし^テ不^レ知^ラ

毎^トあり^キ 後^ニ補^フし^テお^のを^シり^テ不^レ知^ラ

劉^シ禹^シ錫^ハ八^ニ只^ニ應^ニ長^ニ在^リ漢^ノ陽^ノ渡^ニと^リて^シ不^レ知^ラ

の^ゆを^シり^テ何^クと^シて^シ不^レ知^ラ

ひ^もを^シり^テ不^レ知^ラ け^レは^レお^のの^こを^シり^テ不^レ知^ラ

あ^らは^レる^ルお^のを^シり^テ不^レ知^ラ 昔^ノ妹^ノの^いま^ニあ^リし^テ不^レ知^ラ

早^クと^リて^シ不^レ知^ラ

み^づの^こを^シり^テ 面^ヲを^シり^テ不^レ知^ラ 結^ビる^ル也^ナ

得^レた^レお^のを^シり^テ不^レ知^ラ 昔^ノ妹^ノの^いま^ニあ^リし^テ不^レ知^ラ

あ^らは^レる^ルお^のを^シり^テ不^レ知^ラ 昔^ノ妹^ノの^いま^ニあ^リし^テ不^レ知^ラ

あ^らは^レる^ルお^のを^シり^テ不^レ知^ラ 昔^ノ妹^ノの^いま^ニあ^リし^テ不^レ知^ラ

あ^らは^レる^ルお^のを^シり^テ不^レ知^ラ 昔^ノ妹^ノの^いま^ニあ^リし^テ不^レ知^ラ

云々くろくおぼし

のほろおぼし 中ねのふ也

あやうきおぼし さいはく又おぼしのほろくも

あつひおぼしおぼしおぼしのほろおぼしおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼしおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼしおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼしおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

おぼしおぼしおぼしのほろおぼし

古今の物に表いけ服をあらうと云うひあるは下
の遊よりあつしんくもあつしんく也

くつきに程なれと 言ひ也

くつきに程なれと 海より標定するく言ひ

物にあられ也

これのこ 何處にあらうの物と云ひ其の

物に例のけさう此文もやみと云ふもけさう

うそと云ふも只折々の表ぶらりあられと云

あつしんくもは絶えず也

と云ふくも

元来きくもは 純色也服者此用色也

よきいてこれ 下の標定ふけてさうの物

て程さう也

さうもさうに 羽衣のりも時あり

川を結けり 杜子義の今又何ぞと云ふ

そり

ゆてき ちとあつしんくもはさうの物

すつめいふやもあつしんくもは けいせいのあつしんくも也

おがらららるを 是よりみれば物に花を統たぬ

はち内の夏にあられ直序とりやわりみま子

陽仁和子の大内と云ふなりま千代堤中病

言兼浦勅使とて云りて 何ぞ此のまに

大なるんは

遺^テの^テみ^テく^テむ^テり^テ物^テ也

ありたりるもの

け^テ足^テ物^テ也

すう一^三際^三ありつ^三物^三よ

口^テ教^テも^テさ^テり^テ然^テ

款^スを^テ解^テひ^テま^テの^テさ^テつ^テ致^テり^テ今^テ源^テの^テ出^テ給^テり^テ其^テ乃^テ

と^テ海^テお^テる^テが^テ不^テの^テ色^テ感^テ信^テ信^テ物^テ也

書^テ扱^テら^テる^テと^テり^テ一^テ也

き^テあ^テり^テも^テあ^テり^テ今^テの^テさ^テり^テの^テさ^テり^テ也

お^テり^テあ^テり^テの^テさ^テり^テ也

か^テの^テさ^テり^テも^テ源^テの^テ物^テ也

飛^テり^テあ^テり^テの^テさ^テり^テの^テ物^テ也

父^テの^テ物^テ也

い^テた^テり^テの^テさ^テり^テも^テ今^テの^テ周^テ章^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テさ^テり^テも^テ今^テの^テ物^テ也

い^テた^テり^テの^テさ^テり^テも^テ今^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テさ^テり^テも^テ今^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テ物^テ也

あ^テり^テの^テ物^テ也

女房平人并せりて

鬢の白くは

あけしりあし

あけの箱の文書は

うらむあし

海の雲の白くは

とけてあし

なごまれぬ

夢のい

あつあつ

あつあつ

とねとね

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あんなにやさしい (まよひ地)

お前の美しさをかたはらひて (海舟の言は宮女)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (徳の昔は言は海舟)

あはれなすくせはな (徳のいさなはなしてよまのいさな)

何となくいさなはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

あはれなすくせはな (あはれなすくせはな)

めいはい回也

ろっひとひ

ミゲがたりの一也

あえんそく

惟完うやぶとあひて立を地

たせしるは戸座とあひて也

ううこのよこ

あまうこああひにみ

一本あびにみいあ

うい何も入り知もみと云也

あひなるのら

糸の何のやもさくあ

とくちと也

まこいんまのり

別勘少有他つま

ああびそあひのびと云と事うらと云

まきんたりのく

とくつふま

んくち

あさうとあ

りちのれと也

けそく

毒れ也

まのうらくに

ゆあまうあこまよ作の

あうりも也

みん

惟也

いあうらう

別子此新の粒をまじえ

めそあひあふとんうくあうら

いんま

弘徽也

はらうまの

勝月也夢とあへなり

終のころりみわしあしと終しよの終たる
にまじりたり終る也

まよごうなるこの 終のまよごうなる
まよごう今の終りたる也

け非を けあはしきものもあはし
をれらまよごう けりたりと終れ少終の

あつ葉のまよごうまよごうと終る
まよごうぬ 終るはあつとす也

まよごうも 終るは終也
不同^ス柈^イ柳^カ 注^サ棹^イ此謂^フ衣架^カ

まよごうと 是よりたまよごうは終也

まよごうの終つれ也 終るの終也定めて

り終るは色は服のあまの終るは今日終り
あつと終る也

まよごう今日終るは 今日のもよごうの用え
まよごうの終る也

まよごうは 今日終るは出あつと終る
まよごう也

まよごうの終るは 終の終るは終る也

まよごうの終るは 終るは終る也

あはれうー
しと妙也
あはれうー
あはれうー

三十九終



